暮らしの広場

がん克服へ【17】
■胃がん編

工藤　明敏

胃がんはピロリ菌感染症

ピロリ菌

ピロリ菌が胃に与える影響が大きいことが分かってきました。1983年、オーストラリア人によって胃からピロリ菌を培養することに成功しました。ピロリ菌は全世界人口の約半数が感染していると言われています。

感染率はその国の衛生状態に影響を受けており、発展途上国ほど高くなっています。わが国では20～30歳では20％程度、60才以上の約70％が感染していると言われています。保菌している親から離乳食の口移しという感染経路が有力視されています。

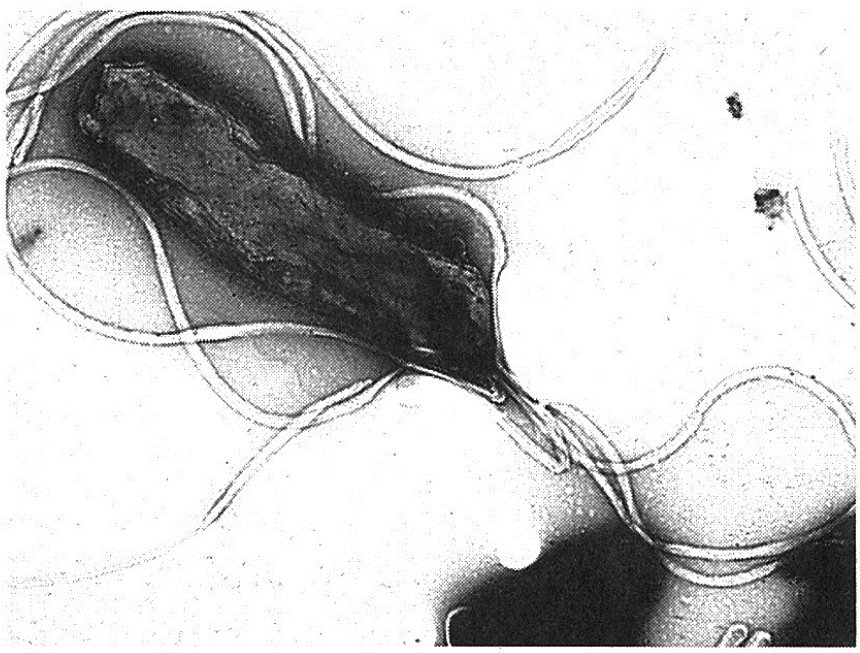
胃の中は、胃液に含まれる胃酸によって強い酸性の環境にあるため、長い間細菌は生息できないと考えられてきました。

ピロリ菌はらせん状の細菌で、胃粘膜の上の粘液の中にふわふわ浮いて生きており、ウレアーゼという酵素を大量に作り出して、胃液中の尿素をアンモニア（アルカリ性）と二酸化炭素に分解します。このアンモニアでピロリ菌周囲は胃酸が中和され、胃内で生息（感染）できるのです。

ピロリ菌が生息するだけなら、症状が出ることはありません。ピロリ菌が原因で何らかの病気が発症したときに症状が出てきます。ほとんどは「無症候キャリア」と呼ばれます。

殺菌を免れたピロリ菌は粘膜表面で増殖し、やがて粘膜層は破壊されます。粘膜による保護を失った上皮細胞が傷害され、きれいに並んでいた上皮細胞がバラバラになり、萎縮性胃炎や胃潰瘍が起こります。

胃潰瘍になれば、胃がしくしく痛む、胃炎が起これば、胃がもたれる感じがするなど、病気によってさまざまです。炎症が慢性化すると、炎症に引き続いて起こる組織の修復過程で細胞のがん化が起こると言われています。



ピロリ菌は胃粘膜に生息し、自身が作り出す酵素で菌周囲を中性環境に保つことができる

日本人のピロリ菌は、欧米人のピロリ菌に比べてがんを引き起こす力が強いことも分かってきました。

このような研究結果から一部の遺伝性の胃がんを除いて、「胃がんはピロリ菌が引き起こす感染症の一種」と考えられるようになりました。

萎縮性胃炎になった場合、その後の胃がん予防のためにピロリ菌除菌治療が勧められます。ピロリ菌を持っていると、千人のうち年間1人から3人が胃がんになりますが、除菌すると発生率は約十分の一になります。

ただし、萎縮性胃炎以外の慢性胃炎と呼ばれるものの原因には、ピロリ菌感染以外に加齢、塩分の過剰摂取、アルコール、タバコ、野菜の摂取不足など多くのものがあるので、ピロリ菌を除菌したからといって油断してはいけません。

（阿知須共立病院診療部長、外科部長）

＝第2火曜日に掲載